

235
5
229

014091-001-9

235-229

三条大意

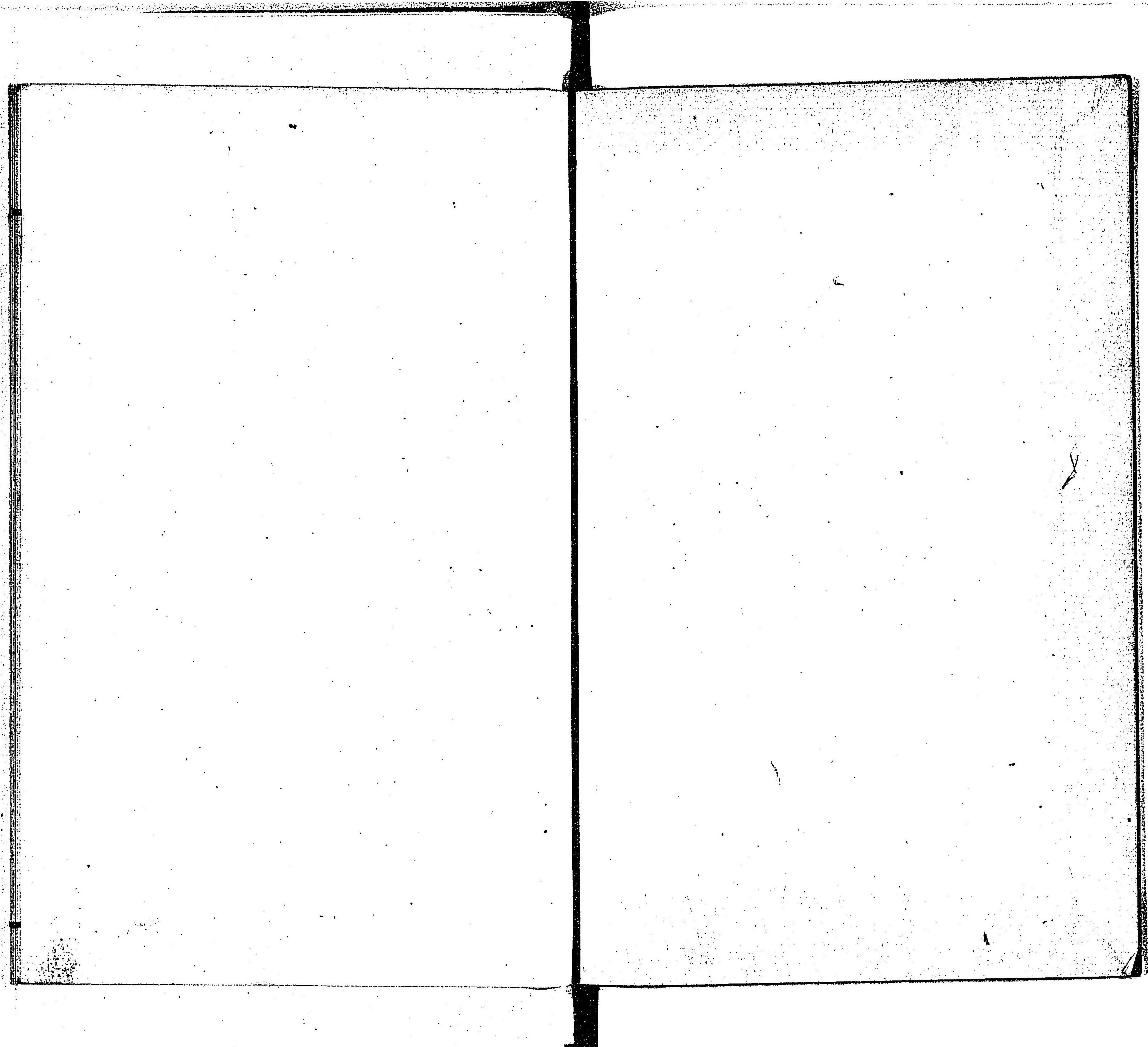
矢野 玄道/著

1冊

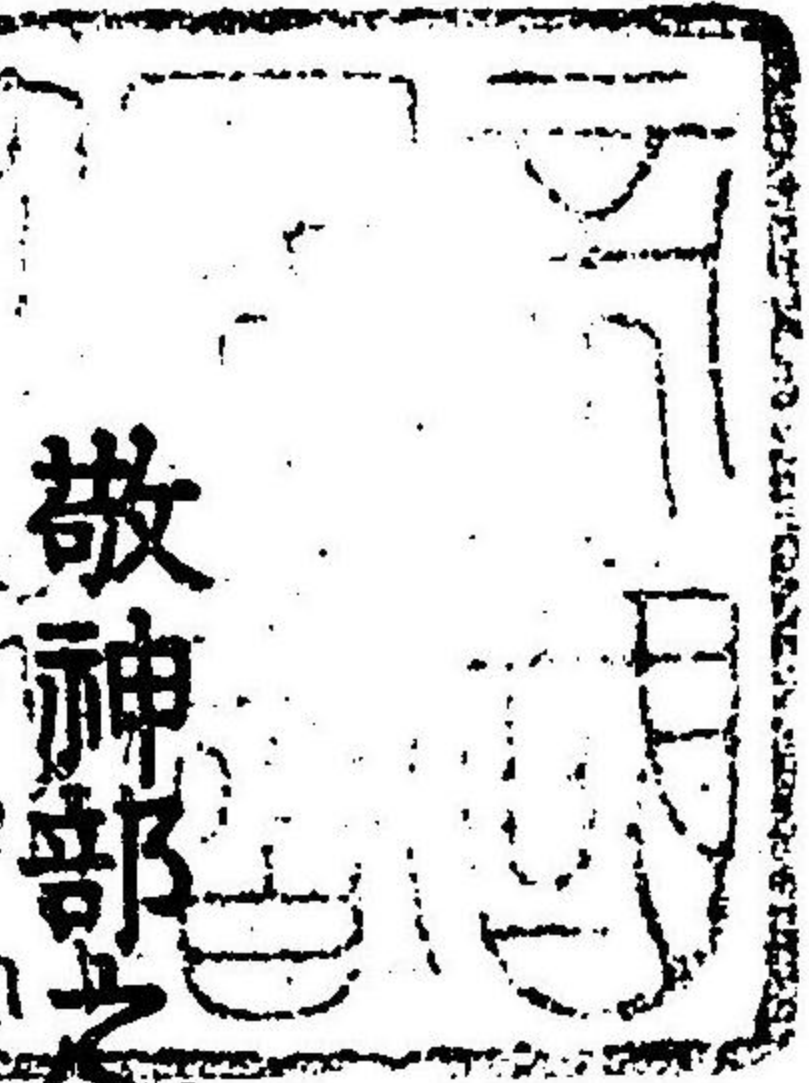
M8

ABB-0351





三條大意一之卷



敬神部之上

平朝臣玄道謹述

姪 清水御
門 伊豫國 常磐拜精戈
人 豊前國 末弘嚴石 校



敬神とは神様を假初小も疎略小せび。そゆ心カ成盡して。

大切小仕奉る事を云ふ。凡て此等の玄旨どもは田中ぬこ。

謂えはづ神を申はことの根元は。今現小拜奉る御日様は

奇々妙々小御座遊むはを申たる稱小て。其とて淡く稱申

して。天地を御作遊むしたる神様。其かの貴き神々様を

勿論小て。又轉じて何小ても不思議ある海山や。まゝ龍虎

や狐狸の類をも申に稱を相成とる事ハ。先師等の委き説
あり。さてそれ神々様を。大切小致し仕奉らて叶えぬわけ
は。此天地の中。有と有も。依万物を。一切は事物をも小
悉小八百万神とて。多くは神々様の御蔭小漏る物とては
おき事おふ。今委曲申すは。中々一月二月小て。申盡
はる。小あら。第一小知り奉らては。叶えざ。依神
様のみを申さむ。天御中主大神。又御名。天皇。皇産靈大神。伊
邪那岐大神。よ。伊勢两大神宮。出雲大神宮と。氏神産土神
等小坐にあり。此天御中主大神。皇産靈大神。伊邪那岐大神
を申奉る神様の御恩徳。小て。天地万物も何事も。人間も生

生し。伊勢内宮小坐に。大神宮と申奉るは。即天子様の御先
祖。小て。天日御国を。知看て。天地万國。大君主小御坐し。そ
の御光明。は。万國を御照遊むに事ハ。申にまでも。外宮
大神宮は。人の食物。衣物。住居の三小幸福賜ひ。此两大神宮
は。御かけ小て。我人をも小。此世の間。小生活。なる物小て。一
日片時も。それ御恩。被らぬ間。なく。その御神徳の廣大無
邊。小大坐。よに御事ハ。一朝一夕小て。申つくは。べき。よ。あら
び。此。兩宮様。小は。甚。口け。あ。ま。き。ど。出雲大神を申に。此大
も。先師の玉。襪。因て。見。る。こ。方。教道。は。始。め。万
國を御造。固め遊ばし。又人民の道とて。万。教道。は。始。め。万
の藥方。呪禁。は。方。ま。で。も。世。小。粟。嶋。様。と。申。に。少。彦。名。大神。と。

諸共小御定めおされ。此天下は盡く御治め遊むされ。此神典小見えたる如く。皇産靈大神と。大神宮様との御詔小とりて。天子様の御先祖。邇々藝命様小。御上おされて。ちて隠事として。世人の目小見えぬ世界が有て。即天下万人の。此世は去て往く處の。謂る隱世といふ處の大君を御成遊されて。神代も今代も。やこし小變らば。御坐成さる事申さとも更おす。それとゆ此現世小まは天子様ハ。即大神宮様の御嫡子小て。天日の御照と遊むに如く。天下中は。まへて御治め成さる事と成り。又出雲大神ハ。天子様の天下の大君と御座おはれて。古來其諸國々郡々諸領を大名等。近

くは諸官人等の御坐有て。各此を持分て御治めおさる。如く。國々小一宮。およく産土神。氏神の御坐おされて。各夫々小分持て。それ氏子氏人を。御治め遊むに事あるは。その上は。大君上を坐て。諸仙諸神諸鬼類を御支配遊さる事と成れるあり。又大加と人間の前生。一生死後。は御世話。其各所の産土神様。が成さる事。も。次々小申まの如く。さて人といふ物。は。できたる根元を。外國小て。神の土を丸めて作す。そめ。たとも。又土中を。り。蠶々。虫の如く。わき出と。おふ。と云。ま。ども。神國ある我皇國小。皇産靈大神。大神宮様。と。ゆ。仰せ傳すの神語は。上古を。り。天子様は。御所小。傳

正タカシき傳説ツテゴト有アて。此コノ天地アマツチも日月ツギヒも。諸ホシ万星マンホシも。御造出ミツクリ
と遊アソビむしたる。皇産靈スメラヒコ大神様オホカミサマと申イハ奉マツルる。奇妙キミヤカふまぎの神様カミサマ
の御子ミコ。伊邪那岐イザナギ。伊邪那美イザナミ命ミコトと申イハ。二柱ニツチ大神オホカミ坐イマ々々て。万神マンカミ
はと人草ヒトクサの祖オヤも。御生ミウマヒそめ遊アソビばととる物モノ小コて。此コノ二柱ニツチ大神オホカミ
は御ミ聞クふ。まゐ風神カゼノカミ。火神ヒノカミ。金神カネノカミ。水神ミヅノカミ。土神ツチノカミの五元イヒノ大神オホカミを御生ミウマヒ
遊アソビむして。天地アマツチの万物マンモノを盡ツクく此コノ五柱イツチ神様カミサマは御神德ミイツツ小コ。漏モレる
物有モノる事コトふし。又殊コト小人コノヒトを風火カゼヒの二ニ。天アメの氣ケ小コて。父ウチをり
受け。水土ミヅツチの二ニ。地ツチ形カタ小コて。母ハハをり受ウケとる物モノかれど。委ツクく云イハ
へど。伊邪那岐イザナギ大神オホカミは分御魂ワケミタマ小コまは。生産日神イクムスヒノカミ。足産日神タレムスヒノカミ。王タマ
積産日神ツクムスヒノカミと申イハ。神様カミサマの御功德ミイデ小コて。生産日神イクムスヒノカミ。専風火精モハラカゼヒノカミ
積産日神ツクムスヒノカミと申イハ。神様カミサマの御功德ミイデ小コて。生産日神イクムスヒノカミ。専風火精モハラカゼヒノカミ

靈タマもある天氣アマノケ小コ幸サマシ子コたまひ。足産日神タレムスヒノカミ。水土ミヅツチ精靈シヅメとある
地體ツチノカタの方カタ小福サマシ子コ賜タマフひ。それ中ナカ小。王積産日神タマツクムスヒノカミと申イハ。神様カミサマの
玉金氣タマカネノケをいふるま。本神靈ホンカミタマを結成ムスビナシて人と生れさせ給たまひ。ま
る金風火カネカゼヒの三氣サンキを精神シヅメと成ナリ。水土ミヅツチの二氣ニケを即形體ツキカタと爲ナシ
給たまへる事コトと聞キコゆるあ。佐藤信淵サトウシノブが説イハ小世界コヨリの万物マンモノを皆みな
散チリり。或あるは合あひ。或あるは判わかる。此コノ精氣シヅメ世界ヨリ小コ充滿ミツて。或あるは疑うたげ。或あるは
いへども。大オホう。土ツチ石イシ生ナ植ウエ活物イカルモノの三種サンシュある。法ホウを以もつて。此コノ
を分わか離わかせ。ば。皆みな四資シシ。歸カエる。物有モノること。あ。こ。ま。と。此コノ四資シシ
妙タマシ合あて。万物マンモノを發生オコる。地ツチと。り。必かならず。天アメ日ヒ御國ミクニと。り。照あ射しせ。給たまへ
る。天アメ柱ツチの精氣シヅメと。大オホ地ツチと。り。蒸あ発はる。地ツチ柱ツチの靈氣シヅメと。り。主ミ宰サ
小コ因よること。あ。る。天アメ柱ツチの精氣シヅメと。大オホ地ツチと。り。蒸あ発はる。地ツチ柱ツチの靈氣シヅメと。り。主ミ宰サ
騰あと。して。万物マンモノの消長シユウチャウ終始シュウジも。皆みなこの二鹽ニシホの合あ散ちる。靈氣シヅメを
お。め。ま。と。風火カゼヒを氣ケ有アて。質シツ有アて。氣ケあ。き。物モノ小コて。水ミヅ土ツチ小コ混ま和やて。揮ヒ発は
運動ウツクの妙タマシを爲なす。土ツチ水ミヅを質シツ有アて。氣ケあ。き。物モノ小コて。風火カゼヒを二氣ニケを

含蓄て化育生長の用を爲す水の性質を堅氷なり造化の
 雲氣を含蓄て漁散流動して水の用を爲す土の性質を泥
 泥なり造化の雲氣を含蓄て凝固結定して土の用を爲す火
 を水小加れれば硫黄風を合む者ハ燐硝あり水の風を合む者
 を含む者ハ硫黄風を合む者ハ燐硝あり草木活物の化育を皆
 硫黄燐硝鹹鹼脂油の混和凝合あるもの小て本は天柱地
 柱ニ氣の精靈小とて成ゆ。その大元ハ皇祖天神の神人
 を蓄息賜ふと思ふに神機小因る御事小て天地の二御
 柱は造化の基元四資を成物の資料ありと論ずり委くハ
 その鎔造化育論農政本論さて人初て胎を受る時ハ卵小
 天柱行義等小付て見をさして人初て胎を受る時ハ卵小
 志て母比腹中小倒り懸居て十月小て誕生て生たる時ハ
 一向軟らり小て。うゑて食事もえ知らば泣て涙も無し。二
 月小て乳探て飲む事を知り。七八月小て匍匐を習ひ。一
 年小ある頃より稍行きいで。古歌小へハ立てたてハ老
 めと親心ハわが身よつもる老

門の宸製と申はを或御十月小て齒牙をふし穀物を喰
 出て乳を去て生活る事成し。五六歳小て初めて情思を
 生じて。玩具を好む。八九歳小て物をも覺ゆる頃あ
 れど。物教習を以べし。或人の元日やどちらむいてもめ
 女子ハ十四歳の頃男子ハ十六歳の頃より天癸初て通じ
 せあり。色情のでくる時分小て。此頃小齒も代り。聲も變る
 物小て。何業小まれ。出精の爲初小て。父母たる人ハ。此時
 をつさば學習に事務め志むる。春夜談といふ物小。女
 を仰ぎ。男を伏して生ると云り。玄道云。今も水小溺を死し
 る小。案ハ此通なり。さるを西洋人ハ。此と反さま小て。女
 伏し。男ハ仰ぎて生ると。或物ハ記せるは。案事ハや。或物ハ

昔の兒を目をふさぎて生けるを今の兒は目を開きて産
る此小て今の兒どもハ早く智慧ヲ廻して命もみじのき
理ありといや危り正し。日ぬふる程小。うそ笑ひあどし
も云へ。いや危り正し。日ぬふる程小。うそ笑ひあどし
て。天然の様とるいと羨し。漸々むらふる月小もあれだ。物
小たとめあどして。うひ立こそ嬉ばあれ。客れくはをりふ
しあど。甚泣とる。うはさからぬ小も何ら。菓子あど授く
れだ。嬉ば小玩び。又ひいあは見れば。菓子あど投棄て。ひいあ
小心かくる。いとうつくし。髪置の頃小も成まば。物あどへ
て。又是をと云。又物は袖小隠し。左小移して。右手小て請る。
是貪慾の始あど。其心齊く增長とるぞ哀しき。竹馬は遊び
を更あれど。犬打物の命を取あどして。遊ぶ頃ハ。あいらし

げもさむれど。いぢ悪き子を虫も起らととこあど云ひて。
あろき事ける程親の目小た猶あいらしげあり。袴著る頃
小あれだ。此らの禮法どもハ。神路の志は。髪カミのめでたく。
衣服キモノのうはたとげあるをぞ喜免る。其心あしと云へども。
是愛慾レアイヨクれ始めあり。漸々手習小友小交れだ。教ざる事コトを覺
ゆれど。善事ヨキコト小を覺うとく。徒小日を費ツツはことれこあり。
人心出れだ。種々ハ藝能小。心懸者多けれど。中頃も遂トゲびて
捨る者多く。大かとの人かく様小て。年まぎぬと云へり。棠ダマ
小はることぞ。さて廿四五とり四十までが。何業ナニワザ小ても。功イサナ
の成就セイジユまべき時小て。此時を失ふば。うらむ。務め勵むべき

かり。四十坂初老^{シロコ}をて。仁明天皇の御賀を初め小て。此とゆ
十年ぶと小。昔とゆ賀^{イハヒ}をもとは事あり。四十五までハ。一
日小警へて曰はゞ。午前^{ヒトマヘ}の如く。夫とゆハ午後^{ヒトマキ}の如く小て。
段々小勉^{シロコ}は近く。一年二年と骨肉も稍々小衰^{オドロ}。氣力も減
行^ユまで。頭も白く。齒牙^{ハキ}も朽落^{クチオナ}ふどもし。記^{オボエ}覺^エときも忘れ易^{ヤス}
く。才^{サトリ}智^リ早^{ハヤ}ま者も。遲鈍^ニくありて。少時^{ワカドキ}と老^{トシ}とは。何事も相^{アヒ}反^ヒ
して。遂^ツ子^コ此^コ世^セ去^クて終^ハる^ルあり。凡^ツ種^シの^ノ變^ヘ化^カ正^シ行^ク事^ト
生^ナして。遂^ツ子^コ此^コ世^セ去^クて終^ハる^ルあり。凡^ツ種^シの^ノ變^ヘ化^カ正^シ行^ク事^ト
て。次^ツで。蠶^ハと成^リり。後^ノ小^コ長^ナり。後^ノ小^コ大^オ樹^{ジュ}と變^ヘり。蠶^ハも初^ハに若^ニ葉^{エフ}を
十月^ト小^コ生^ナ出^ルる頃^ノと。甚^シ變^ヘり。孩^コ兒^ニと如^クく。人^ニも胎^ハを^レ受^ケる時^ト
變^ヘり。夫^ハ易^シり。老^シは至^ルて。小^コ界^{カイ}は。少^シ壯^シの^ノ備^ヒ又^モ生^ナり。一^ト生^ナの^ノ中^ノ小^コ
思^シ知^ルる^ルべし。故^ニ幼^キ時^ト小^コは。少^シ壯^シの^ノ備^ヒ又^モ生^ナり。一^ト生^ナの^ノ中^ノ小^コ

老^{ロウ}後^ゴの^ノ備^ヒを^レ爲^ス。生^ナ前^{ゼン}小^コ必^ズ死^シ後^ゴの^ノ備^ヒを^レ爲^ス。冬^{トウ}中^{チュウ}小^コ爲^ス。亂^{ラン}世^セの^ノ手^テあ^テて。冬^{トウ}の^ノ手^テあ^テて。
ば。夏^カ爲^ス。夏^カの^ノ手^テあ^テて。冬^{トウ}中^{チュウ}小^コ爲^ス。亂^{ラン}世^セの^ノ手^テあ^テて。冬^{トウ}の^ノ手^テあ^テて。
し。飢^イ饑^イの^ノ手^テあ^テて。盗^{トウ}を^レ捕^ツへて。繩^{ヅナ}を^レ索^スふ。と云^フ。諺^{コトワザ}の^ノ如^ク。無^ム病^{ビョウ}の^ノ時^ト小^コ爲^ス。
徒^タの^ノ常^{ジョウ}あ^リて。心^{ココロ}あ^リる^ル人^ニハ。常^{ジョウ}小^コ何^ニ事^トも。遠^{トウ}謙^{ケン}深^{シン}慮^{リョ}を^レ用^フ。日^ヒ
多^タき^キも。一^{ヒト}万^{マン}五^ゴ六^{ロク}千^{セン}少^シき^キ者^ノ五^ゴ千^{セン}三^{サン}四^シ百^{ヒャク}。小^コ夢^ムの^ノ有^ル様^{サマ}也^{ナリ}。
ま^マる^ル涙^{ナミ}。老^{ロウ}の^ノ親^{シン}の^ノ妻^メあ^リて。早^{ハヤ}く。事^{コト}を^レ成^ス。父^{チチ}の^ノ道^{ミチ}を^レ知^ルる^ルべし。仕^シ
る^ル君^{キミ}の^ノ時^トあ^リて。早^{ハヤ}く。事^{コト}を^レ成^ス。父^{チチ}の^ノ道^{ミチ}を^レ知^ルる^ルべし。仕^シ
も^モ或^シ君^{キミ}の^ノ時^トあ^リて。早^{ハヤ}く。事^{コト}を^レ成^ス。父^{チチ}の^ノ道^{ミチ}を^レ知^ルる^ルべし。仕^シ
ね^ネ或^シ君^{キミ}の^ノ時^トあ^リて。早^{ハヤ}く。事^{コト}を^レ成^ス。父^{チチ}の^ノ道^{ミチ}を^レ知^ルる^ルべし。仕^シ
親^{シン}の^ノ時^トあ^リて。早^{ハヤ}く。事^{コト}を^レ成^ス。父^{チチ}の^ノ道^{ミチ}を^レ知^ルる^ルべし。仕^シ
て^テ過^カる^ル。老^{ロウ}の^ノ親^{シン}の^ノ妻^メあ^リて。早^{ハヤ}く。事^{コト}を^レ成^ス。父^{チチ}の^ノ道^{ミチ}を^レ知^ルる^ルべし。仕^シ
ど^ドち^チの^ノ時^トあ^リて。早^{ハヤ}く。事^{コト}を^レ成^ス。父^{チチ}の^ノ道^{ミチ}を^レ知^ルる^ルべし。仕^シ
たり^リ海^{ウミ}の^ノ時^トあ^リて。早^{ハヤ}く。事^{コト}を^レ成^ス。父^{チチ}の^ノ道^{ミチ}を^レ知^ルる^ルべし。仕^シ
聞^クえ^ル。山^{ヤマ}の^ノ時^トあ^リて。早^{ハヤ}く。事^{コト}を^レ成^ス。父^{チチ}の^ノ道^{ミチ}を^レ知^ルる^ルべし。仕^シ
と^トあ^リて。早^{ハヤ}く。事^{コト}を^レ成^ス。父^{チチ}の^ノ道^{ミチ}を^レ知^ルる^ルべし。仕^シ

。三條大意一

。七

て。妻琴瑟ひくとり家の訓も違ひもてゆく免れぬ。いかに
人々の取り取る志はあらむや。聲あつうき友千鳥を折
小ふれて急りそ。暮過ぐ年月の人はつものうたと。諫
むるをも等閑小聞きぐにほど小遂ち頭小霜を殘して年
の過る事矢の如きともいへる如く。余も徒ら爲に事なく
頭小霜を戴きて物小もぬれやと。悔のハ千とびせらるる
を年弱き人々よ。はる嘆あ。凡百年生て。わづの三万六千日
らせどとの心あらびよぞ。ふれど。かく生得る者を甚少く。たゞひ百年生おても。病氣
ふれど。かく生得る者を甚少く。たゞひ百年生おても。病氣
や何やと忙き事も多く。さし引て見れぬ。樂む時ハ誠小少
く。夜ハ寐て過にちど。算用してハ。百年は間小ても。實小一
睡れ間小異あらば。故に養生とて。此身は保つ事をも知る
る。又此世を只假そめれ世小て。此世を去て後ぞ。本世
といふ事。知らばハ叶えぬ事ありける。その養生の事は。

長きことあれど。先おきて。古歌小百年を花小やどめて。と
ぐこそし。此世をてふの夢小ぞあてける。又ぬるが中。見
はをのみやは。夢と思ふは。あな世は。現をハ見ぬ。いつ
までとのせう小物を思ふらむ。時たまを。小知らぬ命小。
有るは。なく。无さハ。數そふ。世れ中。あはれいつまで。あら
むと。さらむ。ま。今日までは。と。小のみきく。そのあされ。
いつ身の上。小成む。や。さらむ。浮世をば。そむの。今日も。そ
む。あむ。あに。何れと。小。思ふ。る。き。身。う。ま。世。中。夢
を。見る。く。ぱ。う。あ。く。て。あ。ね。お。ど。ろ。の。ぬ。我。が。心。の。ぬ。ま。と
年月。い。ろ。ど。わ。が。身。の。送。り。け。む。き。ぬ。ふ。見。し。人。け。ふ。ハ。无

お世小。又「えぬまきばまこも此世小。かへりこぬまごて山
ぢぞ。の取しうとけるまこくは枕たびとは誰う。いむおま
し。終のまみうハ。野山あゆけ也。あど詠たる通りあり。又或
文小。樂むべし捨つるらば。人間の一百年。豈三万日を出
むや。金錢を愛して愁勞さる事ありれとも。何のそれ。百萬
石。草の露と云る。俊成卿の老後小詠れある。定めあき。世
も。案小。尤ありや。 小も若まハ。頼みあり。せふもかく小も。老れ身ぞうき」とあ
ふ。定家卿かへし。小のくよ。老はあまされ。年もるつ。定
免あき世小。あのお身ぞうき。此の如く小て。若きも頼ま
く。又老ては。いとく。此世の限も近くあれ。ば。人の道
たつくし。又後世の事。覺悟りて。迷惑ぬ様小致はべくと

そ。寶物集小。一生を過安く。万事夢れ如く。年月ハ射矢の如
く。少時も止らば。此羊の歩隙行く駒小喻ふ。富る者必し
も永のらば。命ある者必しも久のらば。故小貴賤も賢愚も。
延喜天曆の聖帝も。漢土の堯舜も。影たご小留賜をば。三平。
三道。四納言も。衣通姫も。小野小町。又楊貴妃。李夫人の艶美
あるも。頼光。頼信の謀は賢う。とこも。維衛。致頼。人小怖ら
れこも。一人も留る者あし。定業限有りて死る小ハ。神は祈
るも。佛小申はものひあく。永保。雅忠。が藥も叶えば。保憲。晴
明。が祭も徒事あり。此世れ離れごとく。親まも疎きも。見る
人おとよ。名残惜ま別小て。假初の旅さへ。家立立出れば。悲

き小。況て夢小見ぬ。何ある所とも。何因とも知らぬ地よ。一
日片時も離れがたき恩愛ある者故振捨て。只獨行く心中
推測るぼし。已小今生の縁盡ぬれば。面を雙る親子も床
を一小せし夫妻も。怖ろしく成て。疾捨む事故營むといひ。
方丈記小。行水の流れを絶びて。去りも本の水小あらば。
委小浮ぶうとかさた。且消え且結びて。久く止る事あし。世
中小ある人と。住家と亦かくれ如し。所を變らば。人多りれ
ど。古へ見し人々。二三十人の中小。僅一人二人あり。朝小
死暮小生る。あらひ。只水は泡小を似とゆける。知らば生
死ぬる人。何うとゆり來て。いづくへり去る。又知らば假の

宿。誰の爲小。心を悩と。何小因て。目を悦とむる。其主
也。住家と。無常故争ひ。ちる様云ば。朝顔の露小異あらば。或
を露落。花残れり。残ると云ども。朝日小枯ぬ。或は花ハ萎
みて。露亦消べとも。夕故待つ事あしといひ。古く朝有紅
顏。誇世路暮爲白骨。朽郊原と作れる如く。西人の説小。天下
の人民總て九百兆百万を一兆といひ。あめりて。年中小死にる人。二十
五兆。日小死にる。六万八千人。一時の間小。二千八百五十
人。三十二年小て。世人新舊相變易とも云ゆ。在原行平。卿の
りあせりと。待のひは。涙のたきと。何きたのけむ。藤原家隆
卿のぼり。あくも。明日の命をたのむ。あ昨日も。くれし心
が。ちひ小と。詠まると。如く。生ある者。死あるは。寤小定め
が。とく。明年とも。今年とも。今夜とも。前の呼吸小。後の呼吸

さ。天知。グ。た。き。程。の。者。小。て。い。づ。る。い。き。の。入。る。を。も。ま。と。ぬ。
と。も。今。日。も。や。や。の。て。そ。の。日。あ。る。ら。む。と。も。詠。め。る。を。思。ひ。
の。め。朝。小。道。を。聞。て。夕。小。死。と。も。可。あ。り。と。い。ふ。言。の。如。く。
明。日。と。い。ふ。ぞ。怠。慢。は。本。あ。れ。ど。人。々。吾。が。身。後。の。靈。魂。の。事。
い。と。く。心。止。め。お。く。は。ち。後。世。に。務。を。い。ふ。た。段。々。小。申。に。通。
べ。よ。と。と。ぞ。う。し。は。ち。後。世。に。務。を。い。ふ。た。段。々。小。申。に。通。
ア。小。て。何。も。む。つ。の。し。な。秘。訣。傳。授。も。あ。き。事。小。て。惟。神。様。大。
君。よ。と。親。小。と。く。仕。奉。り。兄。弟。小。と。く。親。み。妻。子。は。め。ぐ。み。友。
朋。ど。ち。小。と。く。交。り。善。事。を。致。さ。む。と。心。が。け。惡。事。は。せ。ば。そ。
れ。家。職。家。業。を。せ。い。出。し。て。務。む。る。事。也。今。世。小。も。後。世。小。も。
第。一。の。大。財。寶。と。覺。知。る。は。き。あ。り。深。慮。は。大。の。と。謂。ゆ。る。遠。謀。
を。そ。れ。口。案。と。し。て。家。を。吝。嗇。を。事。と。ま。て。金。銀。米。穀。田。地。等。
を。無。上。の。大。財。寶。と。心。得。て。理。義。の。事。は。夢。も。知。ら。ば。近。親。
を。初。て。他。人。あ。る。困。厄。辛。苦。の。難。を。も。救。助。く。る。あ。ら。ば。家。德。
積。善。故。ぞ。一。切。は。打。棄。て。省。ま。ら。ば。甚。き。小。至。て。は。自。己。小。さ。へ。

用。る。事。も。能。え。び。し。て。此。の。子。孫。万。世。不。朽。の。良。策。と。し。も。世。
小。誇。る。徒。の。其。身。死。し。て。尸。未。ど。冷。ざ。る。小。風。前。に。燈。の。如。く。
雲。霧。を。全。く。消。散。さ。る。例。の。多。あ。る。は。家。小。憐。む。べ。く。笑。ふ。べ。
き。者。小。て。神。教。を。更。小。も。申。さ。ば。玄。家。小。も。深。く。此。を。戒。む。る。
事。あ。り。き。漢。人。も。小。人。を。身。を。以。て。財。を。發。し。と。も。愚。小。し。て。
財。多。け。れ。ど。過。ぎ。増。し。賢。小。し。て。財。多。け。れ。ば。志。を。損。は。し。と。も。
云。る。如。く。こ。れ。妖。魔。は。陷。る。る。縁。小。て。且。身。後。の。爲。も。少。益。
あ。き。事。小。心。付。さ。る。を。淺。謀。近。慮。の。甚。き。小。て。愚。痴。の。極。み。と。
い。ふ。か。や。う。致。さ。む。小。ハ。即。上。小。申。に。神。様。の。御。心。小。叶。奉。り。
て。死。後。小。も。釋。迦。や。彌。陀。の。力。を。も。假。ば。そ。の。世。話。小。も。成。ら。
ば。佛。小。も。何。小。も。成。ば。正。ま。神。と。成。て。永。世。小。安。樂。は。受。る。こ。
と。あ。り。此。小。違。ふ。て。神。様。小。は。不。信。心。小。て。君。上。小。不。忠。父。母。
小。不。孝。兄。弟。小。ハ。疎。く。夫。婦。親。子。小。間。あ。し。く。友。朋。小。も。虚。偽。
は。言。ふ。と。不。義。理。を。ま。は。様。の。言。語。道。斷。れ。无。道。者。ハ。乃。人。非。

人として。神々は大ふきらはせ賜ふ事小て。或も生前小罰が
中にも。或もそれ身小罰が當らばとも。その子孫小必に
罰蒙るること小て。此を天のあみといふ。万葉集に天の
万代に。罪知さむと。五百つ網をふとも。我妹子を。高はあ
せだ。知らなく。手綱の濱に。尋ねてもあたむと詠るは。此
天の網とふ故事を。此徒何程田地があり。金銀寶貨。山の
思ひてのことぞ。如く積み有ても。此世は去て死ぬ時は。毛一本かども持て
ええ行りて。皆此小棄遺かま往て。妖魔と云て。惡鬼の中間
小入て。永き世まで。それ苦免る。期ある事か。此を天
善事をせられ。天堂極樂小生れ。惡事をせられ。地獄小落と
云も。此古傳の遺る小て。その往き處を。天堂地獄と云て。
千里の西。又地底小在る小も。あらば。やがて此世界。中小
在て。夫をぞ。冥ハ産土。神様の御支配。まとその上を。出雲。大

神宮の御主宰り遊むさる。事あり。はと上代をり。皇國を殊小出自種姓を。
御正し成されある事小て。出自小三の差別あり。一。小ハ皇
別と申て。天子の御胤あり。二。小神別とて。天神地神の御裔
あり。三。小蕃別とて。外國人の末あり。外國といハ。古く皇化小
漢土。まよ三韓人の末。蝦夷人も。未あり。さて漢人の大
う。漢高祖劉季。後まよ。秦始皇あどの末。多く。それ漢も
秦も。元たの黄帝氏小出で。韓人祖も。東明王小多く出づ
と聞え。蝦夷人も。神禹の後と云。疎遠か。ぐらも。神祇の後
とも。いふべく。やされど。此等の末を。近世小至りては。大の
後世ハ。大りと絶えて。し様小聞えて。源平藤橘。中臣菅原あどの。み多く。成行きて。皆神胤皇胤
のみ蕃行するは。幽界小て。故ある事か。ほべし。さて。我身小
生賜れるを。父母といひ。その先を。祖父祖母とし。その前を

曾祖父曾祖母とし其先を高祖父高祖母とし。我生るを子孫とし其次を曾孫と段々小それ先を尋ね上れだ。つまり天子様う。天神地神等小留るあり。古語ふてハ幾世の祖先小ても此を於夜と唱ひ數世の後小ても此を古といふ。かく相承つぎて辱くも今誰人も此身體小呼吸をして。生活てをる。それ氣息の本ハ宇といふ聲あるが。此ハ先祖代々相承ふはもの小て。其本の本をわし温ぬ。朔上まで見れだ。皆神様と。天子様と小止る事あれだ。我身體を一指爪一髪の毛の微れ物といへども皆かく先祖父母のかたみ小て有のみあらば。古歌よ。我あがら我もむつまじ。父母の尊ぶ大神

や。古き天子様の御物かれバ。成とけ養生を加えて。身行を正くして。身形は痛めぬ。心神を養ひ。情性を清く志。食物と房事慎み。それ言行を始めて。正直小徳行を務めて。家業は勵むるきハ勿論あり。此こそ實小波謀遠慮小て。不朽は良策とは云ふるけれ。右小ほぐ云ふ如く。天地日月諸万星夫々各々持分賜ひて。御治ある故小人間及万物も生來る事故小人の此世は在て。少老病弱を姑くおまて。貴賤高下となく。各その職業あきえ有る事あり。職業あれだ。皆人も夫々小此を悟み務めて。志はしも安閑無事小有るべき者小あらば。さてその分を給ひて。世の福を勵み務むれば。神祇等の大小此を悦び給ひて。世の福を勵み務むれば。まして。身を立て。家固は起す。例和漢古今。數へも盡され。それを只小急め。おて。福祿を求るは。田地を耕さば。稲稼を求め。商賣せむ。利足を求るは。如き理小。此を得る由なく。且遊惰般樂を深く神祇の惡を給ふ所小。終る生

産性命故も亡失ふ基とぞ成ける。生産かくては上た神祇
固家小報奉り。父母多孝養し。中を妻子親族を恵み下ふし
て。徧く貧窮を恤み。孤弱を助ふ。事も成らざるを
時とて。善人の横逆の禍害小あひ。惡人の福祿を得るを
り。天道もあき様の富士山の議ふ。譬へて。皆此百年内外
を疑思ひ虫蟻の富士の論ひ。小て。此生を僅百人の禍小遭
れ。事と思惑へると。古歌う。きも猶む。如く。それ。罪惡の名
を。眞世。天地と。限あき。ま。と。詠。如く。それ。罪惡の名
一。い。前生ある人。古歌う。きも猶む。如く。それ。罪惡の名
ぞ。い。前生ある人。古歌う。きも猶む。如く。それ。罪惡の名
ご。正を。被ひ。清め。む。の。神理。小。と。賜。ふ。小。因。る。事。と。あ。む。さ
試。こ。坐。て。そ。れ。徳。行。を。成。就。せ。し。め。賜。ふ。小。因。る。事。と。あ。む。さ
れ。ぞ。善人の福厄。後世。善神。と。成。て。福。祿。を。益。に。基。と。成。
免。惡人の幸福。得。る。後。世。幽。小。妖。鬼。よ。落。て。永。世。小。厄。難。を。
の。人。と。い。へ。ど。も。量。知。る。事。少。も。能。え。ざ。る。を。幽。世。と。り。現。世。
を。ば。明。鏡。小。透。徹。る。如。く。赫。々。明。々。と。知。着。て。死。後。小。柄。を。握。り。
生。の。行。案。小。因。て。此。多。賞。罰。幽。冥。に。大。君。大。主。宰。と。な。り。杵。築。
大。神。小。坐。に。こ。と。申。せ。ば。や。が。て。幽。冥。に。大。君。大。主。宰。と。な。り。杵。築。
大。神。小。坐。に。こ。と。申。せ。ば。や。が。て。幽。冥。に。大。君。大。主。宰。と。な。り。杵。築。

淨小して汚穢き行かく。の。正。そ。め。小。も。善。業。陰。徳。小。因。て。惡
業凶徳を務め去る事。故。志。に。る。き。あ。り。は。て。ま。と。右。小。申。と
る。如。く。万。人。の。中。よ。正。く。皇。胤。神。胤。小。あ。ら。び。て。種。姓。の。分
ら。び。た。と。へ。木。俣。う。土。中。う。ら。生。れ。と。人。の。未。小。て。も。皇。産
靈。大。神。ま。と。上。小。申。せ。る。大。神。等。の。御。蔭。小。因。て。此。世。小。生。れ
たる。小。相。違。あ。き。事。段。々。小。申。に。通。り。あ。れ。だ。や。う。く。此。天。地
間。小。生。活。て。あ。る。ほ。ど。の。人。え。魚。水。中。小。有。て。水。を。見。知。ら
ざる。が。如。く。天。神。地。祇。の。御。恩。澤。よ。漏。る。事。を。か。き。道。理。あ。り。
此。ら。の。事。今。申。盡。が。と。け。れ。だ。ま。づ。上。小。申。上。あ。る。大。神。宮。様
が。と。れ。奇。妙。小。有。が。と。き。御。事。等。は。い。さ。く。づ。申。さ。む。小。
天。野。信。景。が。説。小。も。凡。生。て。を。る。人。の。大。事。あ。る。物。ハ。衣。も。の。
食。物。住。宅。の。三。小。さ。ぐ。は。え。有。こ。と。お。し。衣。も。て。身。小。き。食。物
の。命。は。つ。ぎ。室。を。も。て。身。安。み。び。皆。大。神。宮。の。御。恩。徳。小。て。
天。益。人。を。養。ひ。給。ふ。と。て。人。小。稼。を。ひ。炊。ぎ。事。蠶。養。織。縫。ひ。及
宮。室。供。造。の。業。を。教。へ。さ。せ。給。へ。る。と。り。そ。の。生。を。遂。と。め。賜

ふ故小。天子とゆ庶人小至るまで。飲食ふ時小。箸取る前
小飯を盤間小祭とて。神徳小むくい給ふあり。天子小は。御
取初と申て。御飯の上小。小き搏飯を置く是ありといひ。世
此を佐波と云も。梵語と偶似とる事小。元々佐波の義
あらむと思ふ旨ありて。余が天道階立小云ふを見るべし。
先師も返はく。此事を云えれ。神人小ても。まづ諸神小奉
て。後小此を食ひ給ふとし。仙境異聞小見えとゆ。ばて度
會氏小神異記小。伊勢大御神の。大御徳の有し事家多
記して。かの繪馬ふど小もある。鎌倉権五郎景正を。十六歳
小て。八幡太郎義家主小従ひて。武衛征伐の時小。右眼を射
られあがら。當の矢を以て敵をい取りて。高名を顯えし。玄
道

云。諸国里人談小。出羽国鳥海山の川の黄類魚を。皆一
眼射ふ。相傳ふ景正。鳥海弥三郎と戦ひて。射られし。鱗をぬき。
此川小て目を洗ふ。故ありと云。那須與一宗高が。檀浦小て扇的
以て。高名しけるも。皆大神宮破深く。信仰し奉りし人小て。偏
御蔭小因りしあり。玄道云。伊王野系圖小。宗高を。右の勸賞小。
丹波国五箇庄。信濃国角立庄。若狭国東宮河原。武藏国蓬田庄。備
中。國繪原庄。五庄を給ひ。那須の總領と成り。伏見小て死し。生
土。那須小その靈を崇めて。御靈祠といふ。よし。後花園天皇御時。嘉吉三年九月廿三日の夜。凶
徒ありて。禁裏小亂入して。長刀小て恐くも。天皇小打掛り
奉りし小。忽目くれ迷ひ。足志ぢろよ成て。倒れし間小。他よ
避賜ひて。王體の恙ありし。其夜小大神宮櫓飼の御馬。御厩破出
て。あけ廻りけるあり。汗かきて。本は御厩

小歸入イリよけ也。此事いそぎ奏聞せる小。それ夜京小亂あり。此の神異と符ワラを合せたるグ如し。玄道云。此は大道の志。其は委く説りき。おれ神宮小侍奉れる神等の御使として。御出ありし小。て古く應神天皇の御陵小。て名馬よのりたる人よ逢ひて。馬を互小相易カする小。御陵マは在アりし土。まよと豊臣太閤カウザムスは時小。御馬小。て有アりしとあるを思合アはるし。まよと豊臣太閤は時小。御神領を悉くおせし賜ひて。宮川をり内をも。檢地し賜ふる。こととて。御使ミツカヒは已小伊勢固まで來キりし小。太閤高藏主と云。比丘尼ヒクニのひざヒ枕マとして。うたゝぬし賜ふ。それ夢小。烏帽エボシ子よ白シま装束きたる人來キて云く。吾を伊勢大神宮の御使ミツカヒかり。神地カミチをも檢地ケンチをべくしとの事。神を恐れざる所シツサ爲あり。檢地ケンチをべくし命イミは取るトばしとて。劔タチを以て胸ムネをさしむと

はと見ミとめや宣ノリひて。大小驚オドロき汗アセ水ミヅよ成賜ひ。いそぎ御使ミツカヒはも呼ヨビかきし給たまむて。檢地ケンチのささともやみ小け也。其後檢地ケンチ御免オンケンあされける御禮オンレ小。とて。黄金百枚サシアゲ指上たまども。是コレをも返マゼし給ひけり。又ある固守カタムシ。親父オヤをり二代不信心フシシンれ人小。て。先祖の大神宮オホカミミヤよ寄附キツクありし。神領カミノリをも取上トリアゲて。一たび代參ダイサンといふ事コトもふく。御師ミツシとも不通トワズ小。て。一度御祓ミツハヒ大麻頂戴オホマタノウケのことコトも無ナりしが。父子の間ウチノミヤ小。不慈不孝の口舌クセツできて。其家滅亡シムボウせり。當世の事ふれど。憚ハヤありて。それ名を顯アハさば。日本固ニッポンハ。根本大神宮モトノオホカミミヤ。御敷地ミツキヂといふ事コトは知らぬも。愚オロカある事コトぞの志ココロ。明小ハ。公儀キョウギの御掟ミツキテを背ソムく故ユヘとハ云イヒふがら。幽小ハ。神様の御罰ミツバテありと

諸人云々。まゝ後光明天皇の御代。承應三年九月十六日。外宮の御祭。大和舞の時。南山鳴動。何ぶと小のあらむ。参詣れ諸人恐る。處。全廿日。天皇崩御あり。まゝ寛文元年正月十三日。七時頃。外宮高宮の道。燈明。ともし。役人の行ける。二三百人して。引ちどの木。倒る。音して。戌亥方。坂さして。鳴行ける。此た。事。小。あらむ。と。は。ざ。免く。處。全。十五日。内裏御炎上あり。但高宮小の。おし。たる。役人。え。知らざ。と。と。又伊勢。或所の武家。下人。大神宮。信じて。主人。小暇。をも。請。え。ば。して。参宮。え。けれ。だ。主人。大き。小怒。て。歸。を。待。て。殺。して。其。尸。を。埋。け。ける。小。其。後。

かの殺されたる人。立歸。を。と。る。を。見。て。幽。靈。と。大。小。驚。き。けれども。は。小。を。あら。む。只。今。大神宮。を。ゆ。下。向。を。とい。へ。ば。あまり。ふ。あ。ぎ。小。て。彼。尸。坂。堀。起。して。見。れ。だ。大神宮。の。祓。太。麻。小。刀。疵。つ。き。て。ぞ。有。ける。わ。ざ。と。主。人。の。名。を。ば。う。い。但。とい。ふ。人。あり。と。云。り。下。小。云。御。う。げ。は。と。万。治。年。中。小。伊。勢。参。詣。の。時。小。も。と。く。似。と。る。詭。あり。因。鈴。鹿。坂。下。の。者。銀。子。百。二十。目。拾。ひ。け。り。つ。み。紙。小。書。付。あり。て。大神宮。小。上。る。銀。子。あり。か。の。男。下。賤。あ。れ。ど。も。心。だ。て。と。き。者。小。て。大神宮。小。上。る。銀。子。私。小。用。ふ。る。ま。様。あ。り。御。師。の。名。書。も。あ。け。れ。だ。届。く。る。ま。様。も。あ。く。て。隣。家。の。人。を。誘。ひ。て。此。銀。子。小。て。参。宮。に。る。と。と。誘。ひ。友。と。い。る。人。四。五。人。

を參宮しける。外宮の御前小て。其人まゝ銀子百二十目拾ひける。さては大神宮をゆ。余小給ひたる銀子あり。いと私小用ふべき事あらばとて。土産物あまゝ求めて歸近チカぢあり。小もあゝへけ。此コノ、鈴鹿坂下の心正直小して信心の輩ハ。上下小くらげ。神明ハたまけ護給ふこと。此一事小ても推知るオシるシるルきキあり。玄道云。此小相たぐひて。心の曲カマ枉カマて不信心の者ハ。眼前ハ。かくカクぬつヌツの御ミばバちチをヲ無ムくクてもモいイつツぞゾハ。予コノの家イ家カ小コ云ク此コノ必カナラばバちチをヲ蒙モウるルことト此コノ比ヒべベてテもモいイつツぞゾハ。予コノの家イ家カ小コ云ク此コノ書シ著シせるル延ノボ佳カ神カミ主ノミとシ正マサ直ナ君ノミ予コノ小コてテ學マカ問ノミもモとシるル載ノボてテ我ガ小コ取リてテ身ミのノ戒イとシまマべベきキことトはハ我ガ弱ヨク冠ノミのノ頃トキとシりリ女メ子メのノ交マとシるル興ノボ宴ノミのノ席ノミ小コ臨ミまマばバ博ハク奕ノミのノ具ノミをヲ手テ小コ取リばバとシりリ今イマ年ノミ五イ十シ八ハチ歳ノミ小コ至リるルとシ申マカされレとシいイひヒ又マタ一ヒト日ノミ此コノ人ノミのノ語ノミをヲさサるルハハ其コノ一ヒト度ノミ米ノミ一ヒト外ノミ酒ノミ一ヒト外ノミとシはハやヤうウ一ヒト斤ノミとシをヲくク

ふとフといイへヘるルをヲ或ナ人ノミのノ聞キてテ虚ウソ言ノミあアらラむムとシ云クへヘるル小コ此コノ神カミ主ノミ余ガ虚ウソ言ノミをヲ一ヒト度ノミもモいイへヘるルことトあアきキ小コのノあアるルことトをヲ聞キくクことトをヲ安ヤスらラぬヌとシてテ即ツちチ其コノ人ノミをヲ呼ヨびビまマやヤとシてテ目メ前ノミ尾ビ張ノミ罔ノミ小コてテ此コノ事ノミ証シせセりリとシ事ノミありリとシ足タ代ノミ氏ノミグク筆ノミ記ノミ小コ見ミゆユ尾ビ張ノミ罔ノミ奥ウキ村ノミ小コ神カミ領ノミ五イ十シ石ノミありリ此コノ神カミ領ノミゆユつきキとシ故コトをヲ文フミ祿ノミ年ノミ中ノミ小コ川カハ水ノミ以モてテのノ外ノミ出デてテ堤ツツミをヲくクづヅしてテ田ア地ノミ許ア多ク害ノミひヒけるル間ノミ所ノミのノ百ヒ姓ノミ予コノのノ祖サ父ノミ延ノボ繁ノミ神カミ主ノミ頼ノミとシてテ祓ハラをヲ修シしてテ大オ麻ノミ坂ノミ川ノミきキしシ小コはハしシ立タたタるル小コ次ツギ第ノミはハ水ノミ大オ麻ノミをヲまマけてテ川ノミのノ瀬ノミもモ變カりリとシてテ田ア地ノミとシ成ナりリ故コト小コ其コノ所ノミ神カミ領ノミとシ成ナりリ今イマ小コ寶ホ殿ノミをヲ立タてテ防カ河ノミのノ祓ハラをヲ修シ行ノミせセるルことト絶ツ以モ箇ノミ様ノミのノゆユりリがガとシ記シ事ノミ諸シ罔ノミ小コ數ア多クありリとシてテ玄ソノ道ノミ云ク和ワ漢ノミ故コト事ノミ談ノミ小コ曰ク濃ノボ州ノミ木ノミ曾ノミ川ノミのノ下ノミ流ノミあるルがガとシてテ故コト小コ巨キ石ノミ水ノミ中ノミはハ激シ浪ノミ高ク漲ノミりリ盆ノミ水ノミをヲ事ノミ幾シ千シ万マン人ノミ許カりリありリ寬ノボ文ノミ年ノミ中ノミ小コ船ノミ子ノミ相ア議ノミしてテ則ツ天ノボ照ノミ大ノミ

神小禱り奉て巨石の上小中臣祓を標出に爾とゆ水勢漸く減じて巨石の嶮遠くして船傾き覆るの難を免れ人皆服敬せべと云事又上野国ハカタクの者庄三郎と云るがゆしあしといふ事あり若ハカタクまゆり予の外舅三日市秀安の家小居けるが成人の後金銀衣類なども不アツ集りけれぬ故郷小飯とける小信濃国佐久郡岩田村のやど小て忠行ぬと云佐久郡は岩田村中山道の宿驛あり吾故郷あり夜盗人小皆取られけりどもこの古事の傳へ今えあし夜盗人小皆取られけりて四五日もやありけむ宿主の子は狼喰殺しつ亭主嘆きて狼のこぶちといふ物をかけ巻る小狼のゝれる故隣家の人をあまよ招マネまて殺さむとほる小狼小ハあらで御祓小ぞ有ける後小聞キケむ庄三郎大神宮の御蔭小て仕出シイダし

たる金銀衣類までも彼亭主盗ヌスし故あり玄道云此小付て多引タヒき近頃の家事をも取いで神廷の宮人等ハ幽界小て狼使者とせらる事委ツキく記されたるが家小世人の語小も参宮したる人ハ山中小て狼子出あひても下方小をけ参宮を遂ぬ人ハ上小をくといひむのし陸奥国人の話小死刑小あひとる罪人ツミをらも参宮しとる者をば狼の一向小くをぬ者と聞ることあり其時をうウる故家の有る事とも知らでちて在しを右れ故事をまよ余の外舅思合オモむるよいと恐オソく辱ウチき御事ぞありまよ余の外舅三日市成隅武州へ下る時秩父郡吉田小て旅館の近邊とゆユ火事ありて既小隣まで焼ける時大神宮の御師の神力小て此家ケ助給へと亭主頻キリ小願へバ物モノうき所望シヨモウのふ神カ小ても加様小たけき火をいの小しても逃ノケるまじと思すども神明小誓チカヒて祓の大麻を取て大神宮を遙拜せし小

俄小風加はりて。軒まで付する火を消す。とそ小焼行りけ
也。玄道云。此小とく似ること。平貞丈り隨筆。まゝ諸書小
いと多き事。小て。今更驚奉。るき小。あらぬ。ど思。出る。まゝ
小。久保長太郎とて。余が姉。ある人の嫁。ける家あり。一。年近
き。邊。火。おこりて。其家。を。風。下。小。て。逃。る。べ。く。も。あ。ら。ざ。れ
ば。象。頭。山。の。神。小。深。く。祈。奉。也。し。小。そ。の。風。急。ま。吹。り。を。り。て。
奇。妙。小。そ。の。難。を。逃。れ。し。う。バ。を。か。え。ち。代。參。る。人。を。立。と。る
事。あり。と。む。う。し。慥。子。聞。ゆ。先。師。の。説。小。皇。神。等。の。ま。と。い
証。も。有。り。て。此。ら。を。中。々。人。間。の。心。小。て。推。量。り。て。万。が。一
も。知。ら。る。る。ま。際。小。あ。ら。ば。宗。の。道。ま。志。應。安。三。年。九。月。久。保
に。人。を。と。く。此。を。心。得。て。あ。る。べ。き。か。り。倉。弘。宣。下。野。国。小。下。野。宇。都。宮。小。逗。留。して。近。邊。小。大。麻。を。配
と。ける。小。岡。本。村。と。い。ふ。所。の。百。姓。皆。頂。戴。せ。し。故。内。小。四。五
軒。大。神。宮。を。輕。し。免。此。を。請。ま。じ。と。い。ふ。故。彼。ら。が。心。小。任。に

る小。其夜のぬ四五軒の中をり火出て。三軒まで焼けれど。
皆大小驚きて。大神宮不信仰故ありとて。宇都宮より來て。様
様あむもろとして。大麻を頂戴しけり。全十月。同人常陸国水
戸の那珂の湊といふ所。小て。屋。か。こ。小。頂。き。し。を。七。百。餘。軒
の中。小。只。一。家。吾。を。一。向。宗。か。と。て。大。麻。を。拒。み。ける。小。其
夜。り。ぬ。一。向。宗。の。家。を。り。火。出。て。一。家。焼。小。け。れ。ぬ。明。る。日。水
戸。小。來。て。色。々。あ。む。望。して。大。麻。を。頂。戴。し。そ。の。後。大。神。宮。を
深く信仰よ成じとぞ。まゝ上總国天羽郡小。疫。病。を。や。り。人
多く死ける頃。或百姓甚く發熱せるが。幻。小。見。ける。ハ。異。形
の疫鬼。あまゝ船を浮べ來て。早く乘るるしと。病者をせむ

る時。病者の方より。烏帽子エボシ子シ小白シロき装束カサネしするが八人出て、疫鬼オヒカヘを追オヒカヘ飯イしけり。病者我カミ味カタ方カタ飯イせしは。誰タレあらむと。八人ヤチに歸カヘる處を見けれど。伊勢の御被箱ミカドノミカドとあが先置オキとは邊ヘ小コて。其形カタきえけり。其コトより熱アツクもはめぬる間。不思議オモシロシよ思オモひ。御被箱ミカドノミカドの箱ハコ飯イ見れど。八人ヤチの數カズも合アヒひ。奇異オモシロシの事コトありといふ。其後ノチを次第シツジ小病勢コヤマト輕カサく成ナリて。本復ホノフタしたり。新アラタ小コ有アリがとた御事ミコトと。其人コノヒトより應安三年オウアンニシ小内宮コウチノミヤ一頭大夫イツトウダイ杉本スギモト正祐マサユキ。上總ウヅマツ圀ウチ小行コウキョウし時。聞たれども。久きこと故。其人コノヒトの名もナあまれとゆとぞ。疫鬼のことは志飛語の多
二編小説るを見るべし。其他御靈驗の多
くて。盲者メクラの眼メがアあき。又寸白虫スナシロムシ飯イやむ人の立願タテガミし參宮マミヤし

て。兩宮の間小て。虫下ムシジて。頓トキ小平コノヘ愈ユしたる事。よと年老ぬるまで子コあき人の御蔭カゲ小て。男子オトコを生ナて。子孫相續コノミヤコトノミヤコトせし事。種々クサカれ神異カムヤマト有アリし事を記し。寶永二年ホウエイニシの御蔭カゲ參マミの時トキれ神異カムヤマト記キ小。江州坂本エチノきせり屋十兵衛ヤチヘイ女房メド。五歳イヒトシ小コあてし子を懷イき。逸スナヘ參マミせしコト。湖ミヅの舟フネ小て。過アヘチて子コを湖ミヅへ落オチしけり。母ハハ乗合ノリアヒの人々ヒトト。驚オドロクき騒サワぎけれども。誰タレ有アリて飛入トビイとり上アゲむとほる者モノ。かゝ。母ハハを聲コエ飯イ揚アゲげ。泣ナクかかむ事限カサかゝ。乘人ノリテもあきれ果ハテいるぐえせむといふ所トコロ小。暫ヒラく有アリて。毛龜モウキ沈シヅし子コを甲カウ小コのせて浮ウキあり。乘人ノリテ是コレは見るとゆ。是コレをくと悦ヨロコび。舟フネ漕コギとせ抱イタき上アゲる小。つゝがアあきこそ嬉ウレしといふも愚オロカかれや。

有て龜をみえしは御被とあり。行方あし。母を餘れ忝かさ
小涙を流し。御迹を數度禮拜して。目出度參宮に。云。藤原高
房卿の西園小下らる。時小涙渡りて龜を害むと云る者
の。ある。故買取て水中放ける。船中。小て繼母の語を受
て。寂愛の男。山陰中納言を海中。小落。入る。小うの。放。とる。龜
の。幼子。を背。負。て。漂。出。し。事。を。十。訓。抄。源。平。盛。衰。記。長。谷。寺
縁。起。か。ど。小。記。し。市。井。雜。談。小。も。出。羽。國。男。鹿。嶋。小。て。大。龜。を
網。ま。曳。上。て。殺。さ。む。と。せ。し。小。鄰。村。の。老。翁。此。を。驚。眼。五。百。文
小。買。て。海。小。放。つ。そ。の。夜。の。龜。老。翁。の。夢。小。見。え。て。禮。を。の
べ。且。曰。く。中。石。村。と。い。ふ。所。の。磯。子。錢。を。打。上。て。砂。小。埋。れ。あ
り。急。ぎ。行。て。拾。取。る。と。兩。度。夢。告。あり。因。て。彼。村。小。至。て
砂。を。穿。ち。見。れ。ぬ。錢。幾。万。と。も。知。れ。ぬ。有。し。を。拾。取。る。小。其。邊
の。者。も。拾。ひ。し。を。領。主。上。杉。氏。を。ゆ。彼。者。陰。德。小。依。て。授。り。と
る。物。あ。れ。ぬ。餘。人。ハ。取。ま。じ。き。旨。命。あり。て。老。翁。一。人。し。て。拾
上。と。る。小。數。百。貫。小。及。ぶ。ゆ。余。も。その。錢。を。三。文。見。る。元。豐
通。宝。か。り。し。は。て。毛。室。が。事。も。虚。談。小。非。べ。と。云。る。共。に。似
たる。事。又。尾。州。知。多。郡。何。某。男。子。二。人。を。持。ける。が。兄。逸。參。し

けるを。第羨ましく思ひ。迹を志し。ひて參宮に。やうくハ
つ小もたらぬ子の心は思ひ立逸出されども。行さたとして
もえのゆるげ。その日熱田に邊までつきこが。兄小もあを
び。日も暮けれぬ。道ふと迷ひ泣かす。あつる所小老人來
て。汝參宮の志あて。日をくらし。とる體餘。小不便あり。
我くる方へ來るべし。一夜明さ。はる。ことの給ふ。此子嬉し
くも。老人の迹。つつき行けれぬ。森の中。小供。あひ行。食物を
調へ。慰謝し。給ひ。し。故。小。逸。參。も。心。易。く。あり。て。馴。々。しく。老
人の膝。枕。小。して。他。念。あ。く。ぬ。い。ゆ。ぬ。う。く。と。は。志。ら。げ。兩
親。我。子。に。逸。參。せ。し。故。聞。て。肝。を。つ。ぶ。し。取。物。も。や。正。あ。へ。び。

迹返慕ひ追りけ來りしが森の中小我子れ臥あるは見付。
人々悦びあふ事かぎゆふし。扱我子返おこし尋ぬれど。右
れあらまよし委く語り。膝枕を思ひしは。一五度の御被あり。
こいあゆぐこと事どもありまづ御被をも守り奉り。我家
へ歸り申さむと勇進にて在所戻り。夫をゆとかく
伴立參官しける。又津の因中れ嶋平田村の。八兵衛が召使
の雪や云る。十二歳の女。錢三百文もちて。五月一日の晝の
七ッ小其村を逸出十町をあり行し小老翁一人白馬を乗り
來てのたまふハ。汝此馬小乗り參官せとて。錢二十文給
也。扱眠りとき時を馬の上小櫃あり。此内小入て寢べし。我

其方を誘ひ。兩宮へ參る傍しとの教小任せ。それ明日兩宮
小參り。彼の二十文小て。御被土産ものを調へ。同四日の明
六といふ小歸り。平田村の此方辻堂の渡しまで來りぬ。神
の渡の近。此處小て雪馬をり下り。かの老人小云ふやうを。
是までも御伴賜れる事忝き次第あり。わが親を三寶寺村
忠兵衛を申者小て。道もほど近し。見苦しくハ候へ共我家
へ御入下さるるを。父母小も御禮申させ度といふを。船人
乗人聞て。是ある女の獨言いふを定て狂女からむと云へ
む。雪は是は聞えり。筋あき事宣ひそ。おれ小居給へる人
小物申さありと答へけれむ。人馬とも小行方おし。雪もあ

きれて。右の荒アラましハ語カタるを。往ユキ來ハの人々も。是コトぞ誠マコトに御利オカ生ダふて。大神宮オホカミミヤその方カタを擁護ヨウゴし賜タマフふ小疑ウタガハシひあしとて。求めし土産ミヤゲものを見ミまば。二十文ニジュウモンよハ買カヒとりといへども。五百文イホヒモンだのりの物モノあアじし。又攝州セツシュ豊嶋郡トヨシマノ神田村カミタムラの彌ヤシ一ヒト右衛門ウヱモンが女メたる。當年トシトシ廿ニ小コあアじし。三ミ年トシ以前イマムネとゆ。腰骨コシホネを煩ワザラひ屈ノビ伸カミ自由ジユウあらアらラび。大神宮オホカミミヤへ平復ヘイフクを祈イノり奉マツルらラむやと思オモひ。閏ニ四月シツグチ月ツキ廿ニ九ク日ニチ。在所ザイシヨを出イデ。一尺イツシツあまみの杖ツエを便タヨリ小コやうウく山田ヤマタのらる御師オシ方カタ小コ著ツき。案内オシに頼タノり外宮ソトミヤへ參詣サンギして。一心イツシン不フ亂ラン小コ病ヤメ苦ク本復ホンフクの事コトのと祈イノり。下向道ゲカウミチ小コ趣オモシし。往來ユキキの人ヒトれ物語モノガタリを聞ク小コ天岩戸テンイハトの殊勝ジュシヨウさ。我ワレも參マツルる人も參マツルつといふ

扱カきく小コ我身ワレミの片輪カタワある事コトを哀カナシとけるグ。何ナニぞ思オモひ返カヘしカても。やうく天岩戸テンイハトへ參マツルり度タラシ思オモひ。譬タトへ岩戸イハト難所ナンジヨ小コして。我ワレ足ア小コて上アガること叶カナえバ。足アのとまる處トコロ。神前カミマエと拜イガみ奉マツルらラむと。宮川ミヤカハをり立戻タチモドり。そろくと參マツルりける心ココロの程ホト不フ便ビンかハり。千里センリも一歩イツポ小コ始ハジるとやらむハ小コて。ほどおく外宮ソトミヤ豊川トヨカハの邊ホトリまで。歩フミつく處トコロ小コ異様コトヤウある童子ワラハ來キりての給タマフえク。汝ナニ信心シンシン何ナニまもども。それ足ア小コてハ。中々ナカナカ岩戸イハトへを參マツルられじ我伴トマナふはしのままふ。逸ヌケ參マツルり嬉ウレシく思オモひ。彼の童子カノワラハれ迹アト小コつき。高倉タカクラ山の麓ノボまで行イく。足の痛イタシやはらぎ。腰コシの屈伸クツシン自由ジユウ自在ジザイ小コ成ナりて。思オモひ外ソト小コ岩戸イハトへも心ココロとく參詣サンギし。女メハ利生オカゲの忝ハジかさ

膽小銘しけり。其後童子又曰。汝が病難立所小平復しと
す。いとく信心私かく追付まゝ参るべき。是を路銀の蓄
小まゑしとて。銀子一ヒトツミ包賜せり。宮中を出で。上カミ館の馳走所
へ來り。茶シ飲吞シ支度して返れと教子給ひて。童子終小行方
知らば成りぬといひ。明和ハ年の御神異記シ。四月八日と
日までをべて人数凡四シ。信州松本に池田村の彦助といふ
百四十一万人ありとぞ。者。御遷宮の材木とり小往て。六月十六日。木小うたれ。腰骨
折て。四年の間。いざゆと成て。様々療治をれども。志るし
かり。是し小。當正月二日の夜。夢小老翁の來て宣く。参宮に
る。汝が病苦救むとの。神勅小任せ來とり。必ば疑ふ事

勿ナカと宣ふと見て。夢さめぬ。夫とゆ此を頼と小。親シき友
坂語らひ。手小ハ下駄ゲをはき。膝小馬の沓クをき。やうく
四月十九日。外宮まで匍匐つき。神前小て祈申はる。第四の
御門小て。右足立けゆ。夫とゆ内宮小参りて祈奉る小。左足
立て。常の如く歩行けゆ。又江戸芝神明六町目の人。五年以
前小盲メクラを成て。名坂了悦リヤウエツと呼て。當年三十二歳小成れるが。
参宮して祈らむとと思立て。五月十八日。俄ニガカに洗足シヤシの行を
始めて。遂小外宮小参りて。今一度神力チカラを以て。兩眼を見せ
賜へと。深フカく禮拜して。内宮ウチノミヤに参らむとせる小。ほど程遠ホトトホ
し。聞キけれむ。先旅ツタヒに草臥クサブレを休めむと。鳥居トリキの外の白洲小笠

をまき。少し目やろこつる夢中。小。天童一人現れ。了。悦了。悦と起し給ふと思ひて。驚き目覚しけれぬ。則兩眼開きて。再々物見ることを得て。餘り有難く。物もいたげ。落涙して。心易く内宮よ参りけり。又攝津国川邊郡。大鹿村の或者の下女。逸参しける。小家の妻。法華宗かれぬ。大小立腹して。主人よ云て。皎らむ早速逐出し賜へと云つゝ。ある小。下女え。ちかどきげむ悪き事とは知らば。神参かれぬ。さのこ強くハ叱られごとて。主人夫婦小御被と土産物。返菅笠小まゑて。指出しける。小夫婦勿體なくも御被及土産物を。寵小蹴つけ。握拳小て女を打擲きて。叱罵する。小爰よふまき

あるは。蹴付くる御被箱とめ。小蛇をひ出て。暫あると見えし。小。後大蛇を成りて。中柱がまき。夫婦を小らむ様。譬へむ方かく恐ろし。夫とめ女房大熱。苦む體を見て。夫初めて頭おさげ。涙を流し。罪を赦し給ふと俵けれぬ。蛇ハ聞入しけしき。小て。行方かく失ぬ。やがて兩宮小代参立。て。懺悔しける。やあり。宮川舍漫筆。小常陸。園霞。浦ある百姓。うら女頭とめ。火焔の出。て。恐退きし。故小。怪見。る。小女の頭の乱れし。小。因て。神宮の。劔。先。御被紙を。元結の。代り。と。あせし。能似とる。神異あり。は。京東洞院。姉小路。有賀長伯の。召使。かぢといふ。女。逸参。せむ。とて。明日。を。京。城。出。る。し。と。連。二。三。人。と。云。合。せ。ける。夜。の。夢。小。大。神。宮。と。め。銀。子。を。賜。え。る。と。思

ひて寤て旅とそひらとて。櫛箱を開く。小守被金子二歩。ふくさの様は物一つ。紙二枚小乗せて有ゆける故よ。いとく有難く思ひて。此をぬけ出て。大津の親許小立とゆて。云々の事坂語して。下向まで。此御被ハ預けおくばし。此金子ハ伊勢へ上申さむと云けれぬ。親聞て。此方小もふまぎの事あり。今朝夢の御告ありて。銀子十二枚賜をゆしとて。親子づれ小て。參宮せりと。山田の杉田氏。梶女小直よ聞け。まよ泉州信達一場村の五郎大夫といふ者の後家長。長く腰拔や成して在し。其子兄弟は者も參して。母の病苦を祈らむやと。五月三日。思立て參して。母は本復を祈ける。實小

孝行の志は納受し給ひて。宮巡の刻よ成て。圀元の母腰立ことあり。子ども歸国して。尚々信心發。直小御禮參とし。山田御師堤左衛門佐方小來て。物語し。又全村與十郎とて。門徒宗の者れ子。五月小拔參りせむとせし。小親見つけ。固く留て赦さば。其夜の夢中小。白き直垂きたる老翁。忽然と來て。兩親を捕へ。大き小怒り給ひて。何とて子と思ひ立し。參宮は留めし。此答小依て。汝をせり殺はると。冷しく宣ふ。兩親夢心小大汗よ成りて。たゞ何事も許し賜。子をば參宮致させむと。佗言はと思へば。夢さめて。物いたれば。かの子夫とゆ參宮しけむ。病氣忽平復は。此子禮參の時。右の堤氏

小來てのまゝ續後神 六月十二日。相州足柄郡狩野村忠七。物語あり。異記小。其鄰の者四人參宮して。三州吉田とゆ渡海して。夜小入て神社浦小著船せり。直小御師の家小行むとる小。捨尻といふ森の邊小て。路は迷ひ。渡更かれど。往來の人もたえて。道問ふるきとるもあく。暫く休らひ居ある小。いづくとどとも无く。犬かけ來て。彼人々小馴親ナレこ。先小立ちて。あと返見返ミカヘ。按内せむといふぼな様かれど。其犬小從オモて。御師久保倉大夫の門前小到る。さて門返叩ノき。其趣オモいひ入る。小實サふふ志シぎの事コトて。悦ヨロコ迎ムて。座敷小招サしぬ。此同行の中。一人を四五十町トウちど西距セる。榊原大夫は且那ミナあれ

ぞ。按内アチ字付ジて送らせける小。彼犬も亦先小立て。榊原氏の門小待居マとゆ。重ねて呼ヨども來コび。行方ヨウあく成ナぬ。捨尻シとゆ道ミチまぐら。數多アの犬吠ヘのレれども。此犬コノむろへぞ。忽タ逃ニ去サとしやぞ。又六月中旬ナ小。下總シマ國ノ北相馬キタ藤代フジ在ザ押切オシ村ムラの。勘左衛門の子。村藏ムラ十三ト小て參宮し。御師龍大夫の家小著ツし小。生ナまて米コ穀クを食クひし事コトあく押オてくへぞ。忽タ吐ハきる故ユ。大豆マのみをくふといふ。あく小評議ヒヤウして。謂イあるぼことて調進テウし奉ホウれる。直會ナの御供ミツを三粒ミいたゞかせける小。其日ヒをゆ常人ツネの如ニく。初ハて飯イをくひ出デて。米穀コの味アジ返ヘ知チれゆと悦エべゆ。又五月三日。大坂オオ南堀江ミナ伊勢屋長平イセの女メつあ。年三十

むりであるが。初め他へ嫁りて不幸小哲人とありて。稚子
二人扱つれて。父家小飯居り。この度そめ二人の子小手を
ひわれ。参宮して。外宮の手洗場小至り。面を洗ひ。うがひあ
どし。浴衣の袖小て。眼を拭ひし小。思えは松小旭のうげあ
どありと見え。猶その邊見よえは小。益眼晴明小成りぬ。
此奇異を聞傳へて。彼女が三四日舎せし。松井左大夫杉本
作大夫が宅小。人々來入り。其實否をみむと群集をかせぬ。
又同十日津国東城郡蒲生村の秋岡伊平家の乳母。参宮の
路をり。大病が受て。曾根某師御家小著ぬ。即醫師二人扱招き
てとせり。小容易の事小あらば。まづ獨參湯を用ひて。甚氣

遣しと云ゆ。それ夜病人の夢小。誰とは知らば。汝が病憂ふ
ること勿き。翌日を愈べしと告と思ひて。覺ける小。伏ある
胸の上小。劍先の袂立賜り。驚起上れた。その大麻ハ障子
の間をり飛去り。去り賜ひぬ。それ神宣小違えは。翌朝氣分更小
病る事あし。醫師も大小驚き。是實小神明の佐賜ふ所あり。
もえや醫療小及むはと云ゆとぞ。又日向国油津善右衛門。
大坂小在て。久助といふ者扱。代参小立しが。御炊大夫の方
小。四月十七日の書狀を翌十八日の己刻小持來れり。御炊
の家人ども怪て。日付が違ひあるからむと云へば。久助
慥小。十七日午刻。大坂を立しといふ。昨夜を何處小宿れり

やと問へば途中の群集小引立られ何處ともおがえげつ
うれたるまゝハシラ懸く打伏コシとる處を神さびとる古フルき森の
中おとこといふその刻限コウケンを計る小此を齋宮サイミヤの舊地キウヂある
ばし大坂を出てたゞ一食ゼキわらぢ二足をきへのめと語
さぬまと文政十三年の神異記シニキも種々此神異シニキ故多く記
せる中小阿波アハ国そのこちり小八歳の小童ワラハ參宮サミヤととき由
故兩親フタオヤ小申コウマシ小幼年の事コウシヤノコトあれば兩親フタオヤ覺オホツカ束ツカふく思オモひ様々
云止イヒトむれども聞入キコエまじば此上も拔出ヌケイデぬやう小繩ナハよて縛シバり
おきけるが翌朝兩親フタオヤ夜具ヨグをまくり見る小其子見ミえげ御
被カ拔ヌ繩ナハ小て縛シバり有アりうたかゝる奇特キトクの有アるは必カナラ參サ宮ミヤせ

しものあらむと逐オヒのけしが逢アえばて飯イハれり四日後其子
飯イハ來る故兩親待マテ悦ユキびあづう四日の間小いの小して參サり
しやと問ト小道中ミチナカ小て一老人出來キタり紙カミ小て作ツクれる白馬シロウマを
ひき是小乗ノリれと申マシされけまば即ヤカテその馬小のウマとて兩宮小
參詣サミヤギし今恙ツガかく飯イハ國クニせとといふ此神異シニキ小依ヨりて阿波アハをり
御蔭ミカド參サ始ハジる寶永の御蔭ミカド參サ頃キリ小全ツ國クニ三之助サノスケ白馬シロウマ小乘ノリて山
本權ホンケン七方シチホウ小來キタり殘ノコしおきし草鞋ワラジ今小宇仁ウツニ館タテ太郎タロウ大夫家
小あり正ただしく全様の奇瑞キズイあり古く道祖神とて祭れる繪馬
の道公ミチノミといふが見ミとめと今昔物語イマシノコト法華ホフワ驗ケン記キ元亨ゲンケイ釋書シヤクショあ
ど小いひ巨勢コウセイ金岡キネオカが繪エける馬ウマの菰コモ戸ドれ菰コモを喰クひ仁和寺
小在アりて近邊キンペンの佃イノ田デを傷キズひ又全ツ國クニ高坊村タカボクムラ油屋アブ與ヨ總ソウ太タイとい

ふもの、小兒三歳あるを。十三歳小ある子守。おひあがらぬけ出むとびるを。家内見つけ。小兒を乳あくてい。叶むぐとし。されど小兒を此小おまて。其方をば參らねるごとて。小兒をば取分て。子守おど發足せさせけり。然る小其小兒程あく死去せり。其家悲とふたす。取行ひも彼これと過ゆきて。三七日小當れる夜。四圍回歴の者あどとて。伊豫國西條新居郡朝日市村市村忠右衛門といふが。家内五人小て。與總太の家小宿をさふ。與總太三七の追善小も成るごとて。此を許さぬ。忠右衛門翌朝發足せむとて。草鞋を付かゝる時小。子守只今飯坐しと云て入來る。見れど彼死しと思ひ

し。三歳小兒返負ひて有せけれど。閏三月廿九日。四月二十日小飯る。

家内あきれて。詞をもえ出さば。親類小人を走らせ。近邊へも告知らせて。驚き悦びあへる。ふさぎと思ひあがら。やかく心さよざれど。小兒の墓塚掘見る小。棺内は勿體なくも。御被有らせ給す。諸人感涙ふたす。只あきれ果ぬ。さて忠右衛門も。四圍を重ぬても。催さるるし。御蔭參を。又といふ事量どごと。路銀もそや盡たれども。施物返乞ひてあどとも。參宮にるごと。かた五人づき小て參れるを。直小聞て記せる由いひ。まゝ阿波國徳嶋家中。西村文仲と云。堀家小てハ死とゆとて葬す。後小冢を。又小川町原小。

三四郎といふ者あり。川ぞとふて。薪の金返二歩請取り。戻
り舟小。多くの旅人返のせ渡し。四五度渡しやとける小。加
の金子を。舟隅小置忘れと返ふと思出して探見る小。紛失
まて見えば。多人數の中かれど。疑をこと思ふ婦人ありけ
れど。參宮の飯を待受て。吟味はるしと走出て。岩戸の下
口まで來て。其婦人を見つけ。大田谷小連行て。たづねけれ
ども。白狀せび。その時山中をめぐり。忽ち一人の老翁出來て。其
金子を。あの者が盗し。小相違ふし。裸小して見るは。と云。
因て衣服返ぬがせて。吟味しけれども。見えば。老翁よと指
さして。脚半をときて。見せまむる小。果して其金子出とめ。

婦人赤面して。金を返して。ぞふく。逃去せぬ。まよと諸國小
話いと多き由を。よと大和國某村小。或人の寵愛せは。鶏あ
全書小云へり。よと大和國某村小。或人の寵愛せは。鶏あ
て。籠小ふせ置し小。一朝行方を知らば。十日許をきて。黃
昏小此家小飛歸せぬ。食物おど與ふれども。一向小くえび。
堀小あげむとせしよ。羽のいの間をめぐり。小き御被返落せり。
家内大小驚ま。參宮して飯れるからむといふとめ。村中一
統。打むれて參宮小出けるや。おむ。又西世古町小住ける。一
人あは。老婆の家小。ぬけ參。四人たづね來り。我等今夕方々
とたづぬれども。宿かく志て難。溢小及べり。何卒一宿返許
されといふ。老婆家貧しく志て。只今有合さる米三合む

うにあり。是は炊て食まるといふ。四人は者一宿する。三合
だり。この米を飯小たきし。不思議やそれ米。一釜小みち。
各食して飢を凌ぎ。翌日一禮をのべて發足せり。堺の町人
豪富の家は隱居家小。伊勢は御被降し。此家門徒宗か
るゆゑ御被返奉禮ことを嫌ふ。それは隣の貧人御被返申請
け。厚く信仰し奉りける。小程かく彼門徒宗の本家。出火し
て焼失ひ。さて先日隱居へ降し給ふ。御被を不奉記の神
罰ちらむと。隣家へ譲りし御被返戻しもらひたしと頼け
れども。かゝく聞入れ。因て挨拶人を入。金子二十兩
返して。それ御被を漸く取もぎし。信心小祭りけり。さて彼

貧人は。二十兩の金子返大坂の街へ持いで。一錢も残さ
ば。御蔭參の人々へ施行して立のへり。とあり。潔白の者
貴ぶ。又世小いふ。乳のみ兒ぞあし。小ひや。一話あ
り。或處小老父母若者三人住けり。老父ハ山へ柴加。小老
母は川へ洗濯。若者を農作。小出さゆ。老母思ひける
は。老父を息子と。あれを。安心あり。とて。川を直小ぬけ出
あり。老父を。老婆と。息子と。内小あれ。氣遣あり。と。これも
山をゆき。小ぬけ出ぬ。息子を。老父母留守せば。たし。あ
り。とて。畑をゆぬけ出さゆ。三人を。らば。宮川小て出
合ひ。互小是を。悦びあひて。若者の。いたく。我を。一日

も早く歸_レ。留守に守るるを。御兩人は老境の樂_シみ。緩_ク々々道中して歸_レ給へといひて。そふを別れ。若者ハ先_ニへ歸_レ。圀_シけ_レ。又堺の町人小_{カネモチ}富豪に酒屋あり。其_ノ家法華_ノ宗あり。其_ノ近邊の者。此度御蔭參の人へ。施行の寄附に頼_リこ_シ小_{カネモチ}亭主慳_シ貪の者小_{カネモチ}て。一錢に寄附もことありし小_{カネモチ}。或日酒土藏の六尺桶に輪_ヲこ_シて。其酒のこらば地小_{カネモチ}まけつれど。主人大小驚_キ。是心得_レ。施行の事おとわ_レたる。神罰あらむと。過_レを悔_ミ。近隣人々へたのみ。寄附物を出して施_ス。それ身もいそぎ。伊勢參_ルに催_セせ_レと。橋村大夫家の參官人の物語あり。又河内圀丹南郡西村に。門徒宗多き處あり。一人あり

て伊勢の御被_レ取_リ集_メ燒_ク捨_テむとせし_テ。それ火にのれ_テ。身へとびつき。總身やけた_レ。れ。大小苦痛せ_レ。これを見て。門徒宗のも_ト。神罰を恐れ。大勢參官小_{カネモチ}出立_ケ。ま_カと大和圀某村に。富豪に酒屋あり。村中々_{カネモチ}御蔭參施行米の寄附を勧めける小_{カネモチ}。酒屋の亭主いふ。諸圀に參詣人自身たちの勝_{カネモチ}手小_{カネモチ}出る事おれ_レ。飢_{カネモチ}も寒_{カネモチ}も其人々の心小_{カネモチ}あれ_レ。何の施_{カネモチ}行_{カネモチ}をむ_{カネモチ}といひし_テ。兩三日經_テて此亭主米俵をは_{カネモチ}た居_{カネモチ}し。小_{カネモチ}何物_{カネモチ}り眼中へをい_{カネモチ}。兩眼_{カネモチ}も小_{カネモチ}つぶれて。盲目_{カネモチ}と成_{カネモチ}しとあ_{カネモチ}む。又播磨圀某村の男一人女三人參詣して。外宮の御廣_{カネモチ}前_{カネモチ}小_{カネモチ}て。風呂敷_{カネモチ}包_{カネモチ}を失_{カネモチ}ひ。群集の中お_{カネモチ}たづね_{カネモチ}しう_{カネモチ}ども

知れば。然る小下だち玉田文右衛門が宅の前小て。一老婆
小逢ふ。その老婆。そこもとれ尋ねらるゝ品を。此包物よハ
あらばやといふ。失あひし品あれど。包物をうけ取。忝しと
一禮はる中。老婆を忽然として見えば。あてぬ。又御蔭參れ
始まらばる前を。米價貴く。諸人心痛せし小。御蔭參始まゆ
て。幾千万人の食料。せても行足がとからむと思ひし小。大
湊。又を河崎へ向ひて。追々と入來る米船の數。九十餘艘。一
万俵餘の米を積入れたゆ。是まで近くも遠くも。聞りぬ事
かゆと。河崎米問屋の人々れ話あり。且よと數百万人の日
日の食料は魚鱗海中とゆ上る事夥しく。數箇月の間ある

小。少しも乏しき事あり。此兩條を思ひても。是皆神明の御
惠感應よまよは事明あり。いので凡慮の測に知るとある
からむや。あども見えとゆ。あゆ種々れ神異のこと。多うる
故。本書小因て見るぼし。さて此ふみよ余が生圀。えひめが
と小はさたらすたるをゆ小。里あゆ小子の志は。す小もぐと。
物とおまじを。京ある直道がきいて。それとみ小あど。あひ
ねとせたる小ぞ。ふと便小つけて。贈上志。もれ小し何
とぞ。雅文俚詞れ打まぢゆ。後さたうちあをば。かたはある
あとさすあて。のは鷓ちふ鳥小似とる。あちのせらゆ
るを。魚をえて釜を忘るといふ言の如く。うまひとをとく

見宥め賜ひぬとぞ。

序小昔記にたふし事此小かい付てむ。文政神異記小
庚寅三年閏三月四日。阿波國徳嶋をり三里りき。富田村
邊小福田村と云所の魚屋儀助男子十二歳ある。御蔭
參小きて昔文正年中ぬけ參の節大畑喜兵衛の方小
宿せし由小て此節も鍛冶屋垣外大畑喜兵衛の方小尋
來て宿に。此子供即文正の古杓持參に。その杓小年號書
あり。文正元成と有て。何と見え。右魚屋儀助たむの
この長者の末ふり。阿波國の銀札裏書よ。今もあほ魚屋
と書き通用せとぞ。文正元年を。案小丙戌よて。後土御

門天皇の御代ふるを。そやく御蔭參といふ事有し。聞
えたり。其後も極めて有つらむ。史傳闕て考ふ。後よ由
ふし。ちて後小武江年表小。寛永十五年夏とゆ。來年二三
月頃小至るまで。遠近の男女。伊勢宗廟へ詣る者夥し。
いとゆるむ。おのげ參にあり。よと慶安三庚寅年小。徳井孝
物子。正月關中。民白衣詣勢州過。此事有と。同書。又寛明
關者日千餘人。經年不止とあり。此事有と。同書。又寛明
日記。正月下旬。天下此人民悉群參。其衣裳悉く白衣
百人。或は八九百人。三月中旬。於て改之。或は一日五六
月まで。或は一日二千百人の付あり。小見え。まは神踊と
時慶卿記小云く。慶長十九年九月廿五日。京中踊町々不
殘と。御所中へ參跳あり。所より跳りの供物。人多來返
答聞。廿六日。禁裏をり。親子三人可參と有。觸躍多。參候小
付あり。廿八日。餘至也。廿七日。躍多。廿八日。又禁中。は六人と

三人之院參候。廿九日。躍。故各院參。十月一日。禁中へ參上候。踊未有也。女院御所へ參候所。踊小付て御縁より可候由。間參候處。踊大略相濟と。不參候間。可罷出由。候間退出三日。躍。又一度禁中へ。又小槻孝亮宿禰。十九年九月廿三日。記小間巷說。大神宮有神軍。令勝御之故。自伊勢躍。始京中町々。每町四五十人づ。令躍之。廿五日。京中躍參禁中。廿六日。廿七日。廿八日。十月一日。二日の條も。全く見え九日。神社考。小有伊勢躍。庶民飾異服。繫綵絹。于竹竿。唱謠而躍。始自伊勢。故名都鄙。殆遍。遂及遠州。駿州。時有人云。伊勢大神飛來。飾幣帛于道路。聚觀者如堵。幕下聞而警曰。巫蠱不祥之事。王者所禁也。莫躍人。莫祭邪神。速禁妖巫。莫惑衆。因此伊勢躍止。後果有大坂之軍。自古民之訛言。時之童謡。史之所載。今亦奇哉。全九月。全二十年三月廿五日。駿府小て伊勢踊と號して諸人風流を盡し。此伊勢と躍始るあり。三月晦日。伊勢踊。踊あり。大神宮飛ひ賜ふといふ。禰宜云。やらうし。竊小唐人を頼み。花火を飛しといふ。依て伊勢踊御制禁といふ事。梵舜日記。王露叢見也。孝徳の書る物。小十九年正月。稱勢州神遊行。海道傳相奉。令禁。はと年表。寛文元年二月と也。神宮子男女參詣はる

事夥し。孝徳り書小。元和二年正月。海道傳送伊勢神宮。吉田言。神无不在。何故且行且飛。宜禁。令棄之于野。寛永六年二月。海道奉伊勢神。下令禁之。といふ。此書を論小足らぬ物。あがり。時々考合さ。ゆ。事もあれ。因小あげつる。よと享保三年春。とゆ。伊勢參宮。とや也。出して諸

因とゆ。群參はる事夥し。倭漢合運小云。寶永二年閏四月。洛中洛外。童男女參詣伊勢兩宮夥。俗稱之。拔參伊勢街道。群集。无立錐地。凡參詣男女。五万五千五百六十餘云。洛中外諸民。携出米錢。或布木綿小袋笠等。於三條五條橋上。施與之云々。又自攝州大坂群參。至秋七八月。遠近諸因群參。誠近世未曾有之神應也。玉勝間小も。或物を引て。四月上旬。とゆ。京並小五畿内の人。ぬけ參宮。といふ事あり。閏四月

上旬とゆ記述ところ。初を一日小二千三千の間あり。十三日とゆ十六日まで。十万人小こえと記。十七日とゆ漸減じて。又廿四日廿五日と。三四万人あり。夫とゆ大坂へ移ゆ。廿六日小を五六万人づ。廿八日廿九日ハ。十二三万人づ。五月朔日とゆ。七八万人づ。三日とゆ十二三万人づ。八日おるとゆ。いとく熾あり。十六日ハ。二十三万人小及べゆ。これ前後の最上あり。其後漸々減じて。全月末小を一万人とありあり。凡。閏四月九日とゆ。五月廿九日まで。五十日の間。凡て三百六十二万人ありと記せ。又全物小。享保三年春の頃詣てし人此數を記しる

るやう。正月元日とゆ。四月十五日まで。参宮人凡て四十二万七千五百人と誌せゆ。これを世の常は年ありとあり。年代記小も。閏四月の中旬とゆ。大神宮御利生ありとて。洛中洛外の童男童女。七八歳を始め。十四五歳の子供。拔参宮にる事夥し。いせ街道を。押分られ。凡六万人とさ。と有記。云々。次第小諸。固へきあえ。又固々とゆ。拔参り夥しく出来とゆ。七八月まで止。粟七斗は數程参るとし。前代未聞の事と云ひ。武江年表小。凡参詣の男女。一日小二三万とゆ。四五万。或は六七万人と云ゆ。京師小を別て。神異をいふ事少うら。或は數十里の所を。二三日

分與ワカチアタ授サツけし。五月五日六日の頃を其數一日小。
廿四五万小及びこととあとと記す。和漢合運小。三月中旬。
大神宮自丹後田邊農民參始。自夫移諸州。京大坂堺及中
国九州關東。老若男女。群參絡繹。如蟻行道中。施宿施食。施
金銀錢。人多。至六七月止。と見え。大平翁日記標注小。續後
詣人の數を記して。四月八日とゆ。八月九日まで。總人數
凡二百七万七千四百五十人。右に宮川舟渡ふて考つる
由。されど宮川も暫の間を舟橋小成る。其時此人數をい
ういふと。茂穂むすねの御蔭みかげと。卷末小故翁の詠とて。ま
ごまごまと。茂穂むすねの御蔭みかげと。事あき日記を見
るうあとあり。此ことといふ事を。道ゆく足のたうしふいひつ。往
けととさといふ事を。道ゆく足のたうしふいひつ。往
せととさといふ事を。道ゆく足のたうしふいひつ。往
皇年代略記小。從二月中旬として。四月中旬及京師下

旬及浪華。其後中圀北圀等參詣。去寶永二年如此。然不及
今年之夥おほと云ひ。ある年代記小。京大坂を始諸圀小。御祓
空ソラとり降下り。種々しゆしゆの靈驗レイケンあらたき事いふば加らぬ
と。此節京師小。あまごまといふ事を。道ゆく足のたうしふいひつ。往
物語といふ書つはつ作らて。其事を毀こて。神明の御利生みかをあい
がらろよ説つ者あり。爰こ江文坡い。此を憤い。其返書かへ編む
て。其邪徒よこ一一小破釋やぶして。諸人の惑まを解と。神明の靈
驗たまを信まじ。正道ま趣ましむ。此は拔參夢物語返答はと題なと
あり。此書三卷あり。上木きして世よ傳は。此文坡いといふ人
るものた。深く仙術せんじゆつを信まじて。養生符籙じやうじゆの事あどをあるせ
此あ。武江年表ぶ。天保元年てん。庚春かうの頃まとりや始はりけ

む。大神宮御蔭参り流行し。次第小諸国より押及し。江戸と
ども。参詣をば者夥し。阿州の者。参詣始免しとめ。四国一
圓小成り。又京大坂小移り。夫とめ諸国より及びことごと道
中施行に宿。施行の渡りあり。駕を美麗小飾りて。参詣の
輩のせ。價を受け。酒飯菓子を饗し。金錢手拭。其外金道
中要用此品を與ふ。貧賤の者といへども。参宮の者へハ。
禮は厚くして。此をもておに宿々繁昌。言語の及ぶ所
小あらばとおむ。十月の頃。此事止むといふ。實や此時
小目の何とめ逢ふは。熊谷直恭の。毎々話れるを。御蔭参
のみハ神異の事を更小も申さば。何やくれやと。語のた

小も。顯とし難き事のみおとし。京擧て家破空くして。参
奉りても。盗人の憂も無く。ばと此を咎めおどして。忽小
御罰を蒙りし類も。數多り。其頃神廷あため小。火災あ
りし。大宮の聊も御恙御はさげりしを。更よて。初め此
事を。矢むせの船中小て承て。後小思合さる小。彼
御さわぎは。前日の事おとしやぞ。此小思合さる。こと
材木を採り小。山よ入れる。織田信長公の薨坐し事を。御
預くき。知れり。と見え。徳川氏遺訓小も。此大臣は。六月
二日小討れ給ふを。京童た。五月半小。それさとし。此
天道の御告ありと見え。東鑑脱漏小も。此は似ること
あ。又大宮ある。孫福氏の語れるは。此の時しも。大宮小火
のほは散くは。状態。雨霧は如くおとしり。バ。い。小も此

難を免れさせ給ふまじけれむとて。諸共相議して。風
大神宮へ遷奉れるまじとて御恙御坐ざりしう。皆參集
ひて。かくてませ奉るは。いと辱く恐き御事あれむとみ
よ元の大宮小遷幸成し奉てむと。ひるをひ小殊外は宮
地震動とゆ。られど何心なく遷奉りし。天朝とゆ。御炎
上の時こそあれ。御遷幸の定めハ。みるむ小伺奉るまじ
まとして。御咎めり。まじとぞ。まじハ羽氏の話。此御蔭參
の有し先つうと。或異人の來て。要とする事の有かれむ。宮
地は中夜幾丈ざり。借賜されといふと。打棄おける小。
重てぬもごろ小。まの請ふまじ。小。彼此謀りて。借與ふる

く返答せる小。やうてあ。小集ひて。物議るとし告げる
と。さて後此參詣起しけれむ。それ事どもを異人の集
て。議しける小。ぞ有けむとい。やゆ。六人部氏が筆記小も。
此時の奇事種々い。やゆき。こ。小慶應三年夏頃。參河
人の消息して。彼地小は。あちあち小。御札守あど。空を
と。降下れゆと。いひたこせとる小。合せて。まじ所々小。て
も。謂ゆる伊勢をとりといふ。があり。さて玄道も。九月の
中頃。此京を立て。大宮小。まかぞ奉りし小。そこあ。小。如
此る事。のまじとぞ。いひの。まじと。十月の初。よ飯りつき
ける。が。京も處々小。守札ふまじと。して。ひまめきあひ。は

てえぢやあいのとをやしつ。少男少女を残るもの少
きまで。朝夕晝夜の間わりば。躍りありく事とありぬ。さ
で恠しき事ども種々ありて。中々數牙もつくされば。夫
とり次々小西国小移り行くとあむ。その冬頃。大宮へ
詣奉るものいとさをふて。或は御蔭参りといひはやし。
或をさるべき事の兆小やふどいふ徒も有るしが。果し
て志の思合さば。事もありてき。ばて神異記の類ハ。か
の老人は盡く齋かつるを。うの會津亂の頃小皆やけ込
し故小。余を二三部ハ求めてもあれど。あうべ口を
しく思ふま。小有あふふみ。今抄出し小あむ。

